

紀前半にかけて、豊前国分寺等へ供給されていることが明らかになった。

第三節 勝山町の寺院

一 菩提廃寺跡

位置と環境

本跡は、京都郡勝山町大字松田二一四三―一番地に所在する。国道二〇一号線沿いで、新仲哀トンネルの勝山町出口北側にあり、京都平野の西端、山裾に位置する。京都平野の中央を長峽川・今川・祓川の三河川が悠々と周防灘に流れており、それらを中心に旧石器時代から近年に至るまで、永い年月をかけ歴史・文化が営み育まれながら発展してきた。

旧石器時代から遺跡は多く発見されており、特に弥生時代の下稗田遺跡・前田遺跡・竹並遺跡（行橋市）は、これまでの遺跡の中でも注目に値する集落拠点である。また、古墳時代では九州で最も古式とされている石塚山前方後円墳（荊田町）が出現し、その後、御所山古墳（荊田町）、八雷古墳（行橋市）、庄屋塚古墳（勝山町）等、京都平野を代表する前方後円墳が存在する。更に、六世紀半ば前方後円墳が小型化すると、巨大な石室を有する橘塚古墳・綾塚古墳（勝山町）、彦徳大塚古墳・甲

塚古墳（豊津町）等の円墳や方墳が築かれるようになる。そして、平野の丘陵部には竹並横穴墓群や前田山横穴墓群の群集墳が存在する。

時は六世紀から七世紀代。豊前国には屯倉^{みやけ}が置かれ、豊前国戸籍断簡に見える秦氏を中心とした渡来系集団氏族が、仏教を中心とする文化を展開するようになる。各郡単位に見られる古代寺院跡（木山廃寺跡・上坂廃寺跡・椿市廃寺跡）はそれらのことを良く物語っていると見える。また、時期を同じくして西日本一帯、特に九州・瀬戸内海を中心に古代山城（御所ヶ谷神籠石）が築城される。東アジア動乱に対しての防備のためと解している。

こうして奈良時代に入ると、律令制下のもと豊前国府・国分寺・同尼寺（豊津町）が設置され、古代社会が法律のもと運営されるようになり、八世紀後半には平野の西端部に、菩提廃寺（勝山町）が建立される。そうして、荘園の発達とともに律令制は平安時代で終焉され、中世武士社会へと歴史は動いていく。

寺院跡発見の重要性 菩提廃寺跡について、『太宰管内志』に次のように記されている。

京都郡菩提村鷲尾山菩提院宝積寺天台宗之旧跡也正徳元年八月再興寺院
以 龍池山石窟、本尊虚空藏 安置此寺 又自 寺一町許南有 一寸坊
塔 五輪大塔 也又自 寺四丁許北 谷有 輪藏 礎 又寺上有四十九

院 宅跡 皆為 竹林 寺領六斛自 正徳二年 有領主之寄附

寺院の時代からかなり遅れた正徳二年（一七一二）の記事であり、文書中の「輪蔵の礎^{りんざう}」は塔心礎のことを指しているものであろう。また、五輪大塔は上層部を欠いており、現在の宝積寺の庭池中に積まれているとの見方がある。四十九院については菩提廃寺とは異なる見解も出ている。ただ、宝積寺、三会寺、霜田寺などについての記録を参考にとすると、最澄が唐から帰国後、延暦二十四年（八〇五）に田河郡香春岳に次いで京都郡久保村下田・菩提にも開山し、四十九寺院を建立したと伝えられている。その後、寺は次々に廃絶していく中で、先の正徳二年の記事に到達する。

菩提廃寺の発見は昭和二十八年ごろ、当時の郷土研究者定村責二が土地の古老者とともに、菩提集落の北谷にある通称「御所車の跡」と言われる心礎と一六の礎石を発見し、更に雑木中に一〇礎石を確認したことに端を発する。この発見を聞いた原口信行は、定村らとともに基礎調査を行い、塔及び金堂の二棟の建物跡を確認したと報告している。その後、史跡審査等による再踏査があり、昭和三十年三月五日、同遺跡は福岡県指定史跡となった。

昭和六十一年度に、塔跡南部分について造園計画があり、削平の恐れが生じたため勝山町教育委員会が調査を実施した。また、一般国道二〇一号線を「仲哀改良」という名称で、平成



写真 3—3 菩提廃寺塔跡発掘調査（北から）

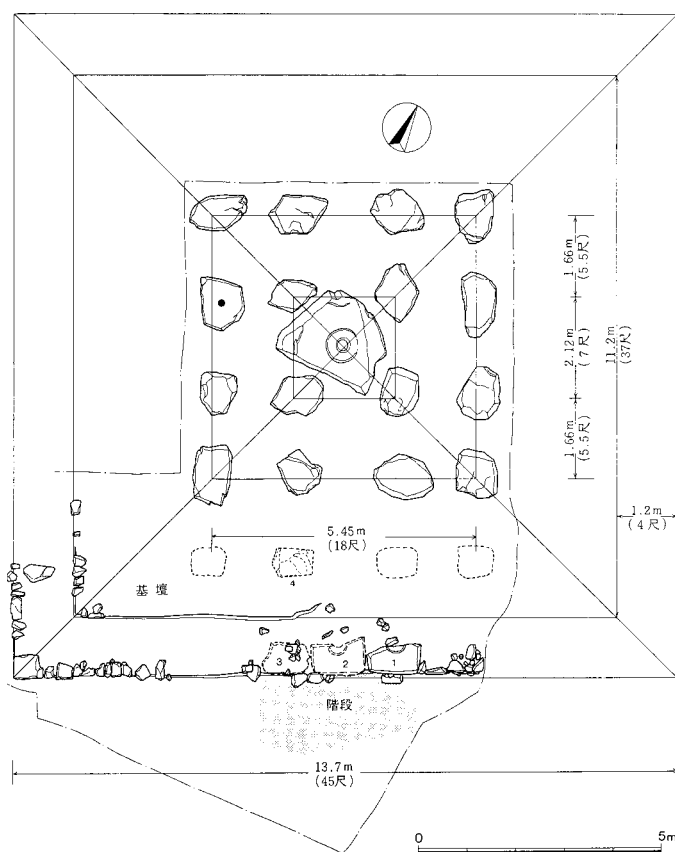


図3—19 菩提廃寺塔跡復元図

石を使用した基壇の構築である。

外成基壇は、内成基壇列から一・二倍幅で構成されており、最も残りの良いところで石は三段積まれていた。南西隅には平坦な比較的大きい約五〇×六〇センチの石を据え、基壇列の調整が図られている。南側基壇列は九・八メートル検出し、そのほぼ中央部に大きな石三個が置かれていた。この石は中央に円孔を有し、それを半載したのを基壇側石に転用したものである。その幅約三・三メートルを測り、南側中央階段の最上段踏面と推定されている。復原基壇幅一三・七メートル（四五尺）である。

内成基壇は南西隅において、かろうじて基壇側石を検

二年度から事業着手となり、それに因んで菩提廃寺周辺域の文化財調査が平成十年から十四年度にわたって発掘が県教育委員会によって行われた。

1 遺構

塔跡

塔心礎を含めて計一七個の花崗岩製礎石が残っている。一部動いた側柱礎石もあるが、四天柱

礎石間二・一二メートル、両側柱間一・六六メートルで、一辺長五・四五メートルが計測可能である。塔心礎は二・五×二・二メートルの巨石で石田茂作分類による「出柄式」にあたり、中央に幅一八センチ、深さ三センチの溝を巡らし、その中央部に径三二センチの円形柱座を形成している。このような礎石は九州に例はなく、愛知県大山廃寺跡や徳島県阿波国寺などに「出柄式」が見られるが、両者とも出柄径が五〇センチを超えており、本例とは趣を異にしている。

四天柱礎石は側柱礎石に比較して若干小さく、八〇×一〇〇センチである。柱座はなく、動いた形跡も見られない。四天柱の心々距離は二・一二メートルである。

塔基壇は二重基壇から構成されており、いずれも自然

出した。石列の石は一五・三〇（一五・三〇センチメートル）で、復元すると一一・二（一一・二メートル）（三七尺）になる。

調査結果から、内成基壇の検出が二間分と広く、また、基壇レベルを勘案すると、側柱及び礎石等の距離などから、内成基壇側までを塔基壇と判断するのが妥当との見方を示している。

そして、二間分の間に礎石抜き取り穴を検出したことを根拠に、塔の周りに廻縁が存在したであろうとされている。塔跡はいつの時点か定かでないが改築されており、検出した遺構及び寸法は改築時のものである。

金堂跡か

昭和二十八年の発見時報告では金堂跡として報告されている。その一部を記載する。

塔跡の東北下手に発見された建物跡は、地面すれすれに原位置礎石が十四基遺り、西辺に礎石らしい三基の枕下石を認め（これは詰石の疑いがあるが塔跡西辺の一基と同様一応礎石の数に入れる）礎石欠失点の地下に詰石をあらため、中央部の礎線交点二箇所地質を検査して、此の遺構が金堂のプランに当てはまる所から、一先づ金堂跡と呼ぶ事にした。金堂跡とするにふさわしい条件は多いが金堂跡でないとする証拠はない。

と記され、東西方向に長い礎石建物跡が報告されている。現在、建物西半分は民家の敷地の下になっており、明らかにすることは不可能であるため、昭和二十八年の報告に従うこととしたい。なお、礎石建物跡東半分は、平成二年度時の文化財調査

図と、原口報告とを照合した際、一四個分が合致していることが認められた。また、金堂跡は、

東西三・二尺二寸、南北二・五尺五寸を測り、遺構は唐尺により横が六・七、七・七、六の三・三尺（曲尺三・三・三四尺）、縦が六・七、七、六の二・六尺（曲尺二・五・四八尺）の想定が可能と考えられる。（中略）

とあり、西辺礎石列から五、六寸低い位置に南北に走る石畳線が検出されており、性格は不明としながらも基壇廻り縁としている。遺跡保存・活用の観点からも、金堂跡及びその周辺部について今後、調査を行う必要がある。

その他の礎石

（図3—20）

外成基壇の階段に再利用されたものと判断されている。礎石は中央部で半載され、復元すると長辺一・二（一・二メートル）、短辺一・一（一・一メートル）、厚さ三〇（三〇センチメートル）である。中央部に径三五（三五センチメートル）、深さ一〇（一〇センチメートル）の円形の掘り込みを上・下方向から穿ち、その中心に径一〇（一〇センチメートル）の穴を貫通させている。貫通の孔から通常の建物礎石とは考えにくく、塔に付帯するものと考え、法隆寺や兵

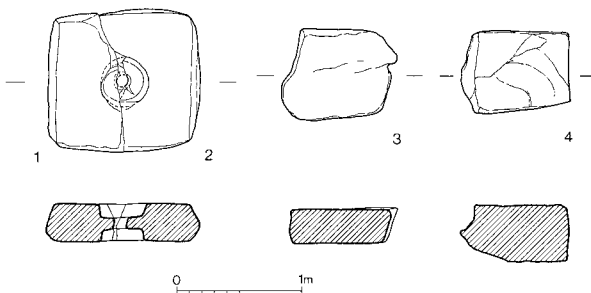


図3—20 菩提廃寺跡・その他の礎石実測図

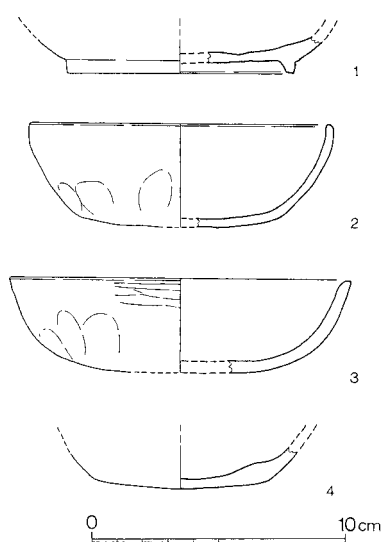


図3—21 菩提廃寺塔跡出土土器実測図

図3—21・1は須恵器で底部のみの小片、高台が低く、復元底径九センチである。2・4は土師器で、二点が復元可能である。

出土土器

2 遺物

塔跡の調査で出土した主な遺物は須恵器、土師器と多量の瓦類である。主として、塔南側・西側外成基壇石列の黄褐色土及び焼土混じりの瓦層から出土している。瓦類については、菩提廃寺発見瓦として、小串寿次所有の鬼瓦と、町教育委員会所有の軒丸瓦も合わせて記すこととする。

庫中井廃寺等に見られる相輪を支えた凝灰岩製の「露盤」ではないかと想定される。

2は口径二・〇センチ、高さ四・一センチで体部から底部にかけて指頭圧痕が認められる。3は復元口径一三・五センチで、高さ三八センチであ

る。八世紀後半ごろの土器と考えられている。

瓦類

発見されている瓦類は軒丸瓦・軒平瓦・鬼瓦と多量の丸・平瓦である。軒丸瓦は三種に分類され、総数二二点（うち一点は町所有）、軒平瓦は三種で二〇点が発見されている。

軒丸瓦 I類（1）単弁一六弁軒丸瓦で、中房に一十八の蓮子を配する。蓮弁は簡素な素弁で盛り上がりがなく、間弁同士が接続して弁周となり内区を形成している。外区には珠文一六個を配し、間弁筋に珠文を置くなど規格性が見られる。周縁は圈線が巡る。II類（2）単弁一六弁軒丸瓦で、I類に類似するが外区珠文帯が消失している。中房・弁区径共にわずかに長くなる。中房蓮子は一十八で、焼成は甘い。小片で明確ではないが筑前神興（津丸）廃寺跡に類例がある。III類（3）単弁一三弁軒丸瓦で、中房蓮子はI類に比較して小さく一十八を配する。弁周がそれぞれ接続して単弁を構成している部分と、小さな間弁が配されて弁周を伴った単弁を構成しているところがあり、文様構成が一定していない。外区内縁には二四個の珠文が巡り、外区外縁は平坦な素文帯である。町教育委員会所有。

軒平瓦 I類（4・5）左から右に流れる扁行唐草文軒平瓦である。上外区に大粒の珠文を置き、下外区には下向凸鋸歯文を配する、いわゆる老司式瓦である。二点出土している。II類（6・7）剣菱状の中心飾から蔓草が上方・下方の二方向から

派生する、三体構成からなる変形唐草文軒平瓦である。ただし右端一体の蔓草は、左右共に剣菱飾上方から派生している。顎は曲線顎で、外縁は二重の圈線が巡る。Ⅲ類(8)忍冬均整唐草文軒平瓦で、ハート形の中心飾を配し、蔓草は左右に二回反転する。上・下・脇区に珠文が密に配されている。顎は比較的深い段顎で、平瓦部は縦方向に削りないしナデ調整が施されている。

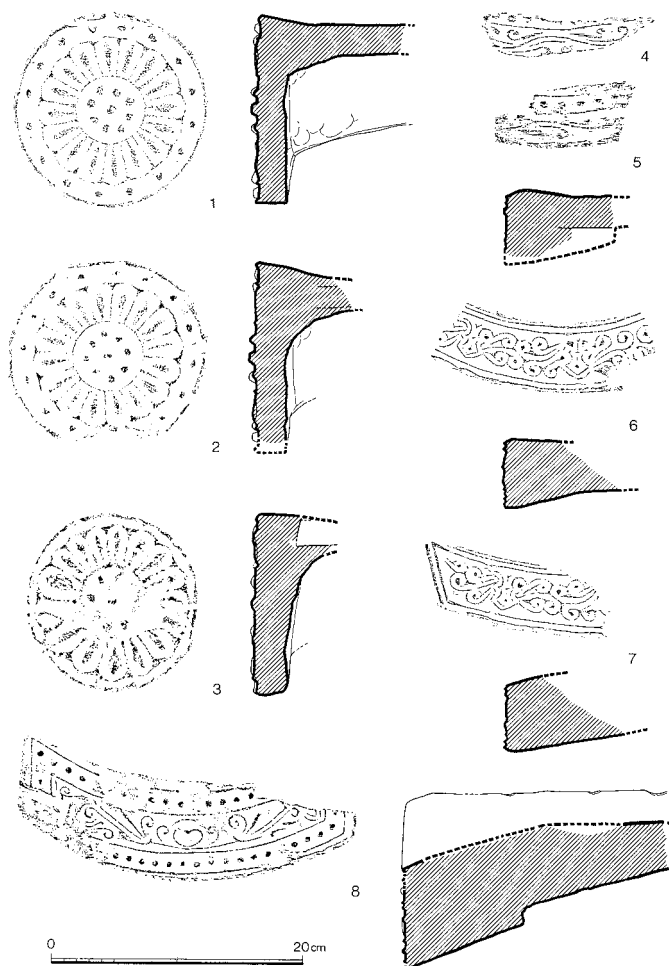


図3—22 菩提廃寺塔跡出土軒先瓦拓影・実測図

右頭端部片の鬼瓦である。形状からして大宰府系鬼瓦に類似するものであるう。

数多くの丸・平瓦片が出土している。丸・平瓦凸面叩きは縄目が多く、分類すると八種類になる。製作技法も丸瓦は行基瓦と玉縁付瓦があり、共に粘土板による製作である。平瓦は凹面に模骨板痕等が認められず、側面端部に布目痕が残っていることなどから粘土板による一枚造りの可能性がある。

以上の出土瓦を整理すると、軒平瓦Ⅰ類の老司式瓦は、出土点数が少なく実際使用されたものか否か明らかにし得ないため、今後の調査が期待されよう。瓦の年代を八世紀中ごろに考えておく。また、軒丸瓦Ⅱ類と軒平瓦Ⅱ類は筑前神興(津丸)廃寺に類例がある。軒丸瓦は小片で定かでないが、弁の形状等は比較的類似しており、同系類と判断してよいと思われる。したがって、軒丸瓦Ⅱ類は文様形態からⅠ類に祖形が求められ、軒丸Ⅰ・Ⅱ類と軒平Ⅱ類の組み合わせが成立しよう。筑前と豊前の寺院間において同形瓦が発見される歴史的背景を、明らかにし得ない悔しさがあるが、神興廃寺跡では「延喜十一年」銘(九一一)が発見されており、年代を考える一つ

の資料になるかもしれない。軒平瓦Ⅲ類は小田富士雄の積年の研究があり、その分類によると十式中六式に位置付けされている。そして、豊前国分寺からも同系瓦が発見されていることを示唆し、菩提廃寺は宇佐地方と何らかの密接な関係があったとされている。軒丸瓦Ⅲ類は、他に類例はなく今後の資料増加を待って検討したい。年代は八世紀末～九世紀代に考えておく。これら軒丸瓦Ⅰ類、軒平瓦Ⅱ・Ⅲ類を八世紀後半代、軒丸瓦Ⅱ類を九世紀前半代に考えておく。

塔跡の調査で得た結果は大きいものであった。上・下成基壇の検出は改築されていたこと。塔心礎形態は出柄式で九州では類例がなく、貴重であると共に寺院の形態・性格が重要視されること。瓦及び出土土器等から創建年代は八世紀後半ごろに考えられることなどである。寺院の終焉は今後の調査を待ちたい。

二 菩提遺跡

遺跡は勝山町大字松田に位置する。国道二〇一号仲哀改良工事に伴う事前発掘調査で、菩提廃寺塔跡から国道を挟んだ対南側にあたる。調査地は道路に沿って四遺跡（東から菩提一～四遺跡）が調査されている。

①菩提一遺跡

検出されている主な遺構は、竪穴住居跡二軒、掘立柱建物跡

一棟と土壇、溝等である。竪穴住居跡及び土壇は出土土器等から六世紀後半ごろとされ、二号土壇跡が八世紀中～後半ごろと推定されている。掘立柱建物跡とその他土壇は、十一世紀ごろの生活痕跡と予想されている。

②菩提二遺跡

主な遺構は土壇四基、柵列一条である。一号土壇は、縄文時代の遺構で、勝山町内では貴重な発見である。二～四号土壇は青銅系溶解炉の壁片が検出され、奈良から以降の時代において、菩提廃寺に関与した鑄造関係遺構とみられている。

③菩提三遺跡

検出された主な遺構は、土壇四基、溝四条、石組み一基、石列一条等である。これらの遺構は中・近世が多く、奈良・平安時代の主だった遺構を検出するに至っていない。遺構検出面は斜面状で、各段差が生じ、その段七・段八の堆積包含層から八世紀中ごろから九世紀前半にかけての土器が多く発見されている。上層部から十二世紀ごろの遺物が少量発見されたため、谷部は九世紀ごろから埋まり始め、十二世紀には完全に埋没したと考えられている。菩提廃寺跡から出土している瓦類も、この段七の西半部から多量に見つかっていることから、付近には寺跡に関係する伽藍の一部があるのではないかと想定されている。

④菩提四遺跡